

二〇一九年度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ ○○字で、または○○字以内で答えなさい、という問題は、「。」「や」「、」「かつこ」なども一字と数えます。

— 1 —
次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

【新聞記者の「私」は四十代半ばで独身の一人暮らしであるが、弟夫婦である亮二と明世がともに長期の入院が必要になり、二人の代わりに娘のなすな（生後二ヶ月）の世話をすることになった。本文は、世話をしはじめてから一ヶ月後、家の近所の小児科の看護師である友榮になすなの予防注射について電話で相談している場面である。】

なにからなにまで、お世話になりましたと、電話を切ろうとしたとき、なすなとふたたび目が合った。やっぱり、あれは笑みではないか？ 目尻が下がり、口もとが逆にあがっている。ホー、ホハ、と彼女は声を出した。ホーホケキョの抑揚で、ホー、ホハ。泣くときは、彼女が世界の重心になった。核からマントル、そして硬い地殻までも抜けて突きあげてくる泣き声は、極の磁力をも狂わせるほどだった。しかしこの表情はいつたいたんだらう。地の底との関係を瞬時に夕ち切って風船みたいにふわりとあがり、そのままはじける。部屋の空気がいつべんに弛緩し、なすなではなく、見ているこちらが小水を漏らしたかと思えるほど力が気持ちよく抜ける。これが笑みだとしたら、笑顔は、どうやらひとりだけのものではないらしい。なすなの笑みは、彼女自身の世界だけをなごませるのではなく、この私の世界をもゆるませる。涙に、笑み。このところの成長は、また、あまりにも急だ。写真を撮らなければならないと思いつつ、携帯を握りしめて、友榮さん、と私は呼んだ。びっくりするくらい、大きな声だった。

「もしもし、友榮さん、聞こえますか？」

「はい」

「あの、赤ん坊って、何ヶ月くらいで笑うんですって」

一瞬、間があった。

「個人差があるから、一概には言えませんが、だいたい三ヶ月かな。二ヶ月で笑う子もいますよ。だいぶ前に点滴打ちに来た、あの優芽ちゃんて子、二週間でもうにたにたしてたって、お母さんが自慢してましたし。あ、じゃあ、笑ったんですか、なすなちゃんか？」

「ついさつき、笑ったような気がして」

「近くにいて、そういう気がしたんなら、まちがいないと思います」

「じゃあ、笑った、と見なしていいわけですね」

② げらげらと、友榮さんは明るい笑い声をあげた。そして、軽くむせた。距離が近くなつて、息が、直接こちらの耳に入ってくるようだった。

「笑ったんなら、笑ったでいいんですよ」友榮さんは自身も笑いながら言った。「笑顔まで《見なす》なんて言い方しなくてもいいのに」

「ほかの赤ん坊の顔の変化を知らないものだから、ほんとに笑ってるのかどうか比較しようがないんですよ。じゃあ、笑ったことにします」

そうしてください、と友榮さんはまた笑った。

「集団接種のときに、みんなの笑顔も見てくださいね。打たれたあとは、泣きますけど」

礼を言つて、電話を切り、湯を沸かし、顔を洗い、髭を剃り、また顔を洗つて珈琲をドリップした。なすなと視線を交わしながら、一杯、二杯。穏やかな表情で、やはり声の出し方が複雑になっている。一音を長く伸ばしたあと、そこにぎくしゃくした装飾音が加わる。ステイヴ・レイシーのCDを流して、ご機嫌をうかがいながら何枚か写真を撮る。そのあとは、電話ばかりして過ごした。明世さんの親父さんの体調は、悪くなさそうだった。あなたには世話をかけてばかりでと、いつもの台詞がすぐに出てくる。明世の身の周りの、下に身につけるものやなんかは、男の年寄りにはわからんから、若い看護婦さん（看護師ではなく、彼はかならず看護婦と言う。なんの底意もなしに、である）にお願いしてね、これが、よくしてくれるんだよ……。

私が用件を話すと、しばらく溜めであるという郵便の束を調べて、乳幼児健診のご案内という封筒を見つけて出してくれた。そこに記された電話番号を控えさせてもらつて、すぐ担当部署に連絡し、伊都川市に提出する書類を②シキユウ送ってもらおうよう頼んだ。三日以内には届くらしい。明世さんの親父さんにまた電話を入れて、うまくいったことを伝えると、孫を病院に連れて行くのは難しいかもしれないが、会わせてやれば元氣も出るだろうになと、娘の不遇を嘆いた。それから伊都川市の保健センターに電話をして、新川さんという人を呼んでもらい、友榮さんの名を出すと、はいはい、③リンジのお父様の件ですねと、なすなではなく私の予防接種であるかのような応対ではあったが、話は無事に通じた。

なすなはご機嫌である。手を握つて、ちよつと振つてやると、声の質がまた変わり、私に話しかけているようにも聞こえる。頬に触り、手に触り、鼻をちゃんと押してみる。お母さんも、おじいちゃんも、頑張つて、それからお父さんも。話をしているうち、彼女は丸い口を開けた。泣くのではなく、口を開けて、なにかを食べたそうにしている。これがミルクの要求なのかどうか、判断がつかなかったが、先んじて準備をはじめていると、③期待どおりの泣き声が背中から徐々に迫ってきた。もう動じない。作り出しているのだから、いつもより時間は短縮できる。手早く用意し、抱きあげて、すでに開いている口に哺乳瓶を近づけてやると、硬いプラスチックの本体が凹むのではないかという勢いで飲む。どん

どん吸い、どんどん飲む。人肌の温度より高めになっても、彼女は気にせず飲むようになった。そのあいだ、視線は自分の指先ではなく、ちよつと離れたところに向けられているようである。なすなおのおなががいっぱいになると、こちらまでいっぱいになった気がしてくるから不思議なものだ。ミルクが入っていくにつれて体温が上がり、頭のとっぺんからおなじみのもわんとした、ミルクと汗の混じった、甘いおいがのぼってくる。ご満悦のなすなとしばらく向き合つて、話しかけながら儀式だけ行ふ。念のための空気抜きだ。出なくても心配はしない。上ではなく、下のほうから空気が抜けることもあつて、それにつられてか、大きなものも出てくる。爆裂はなかったが、おむつを替えてやると、表情がぐつと明るくなる。なすなは、生後三ヶ月を過ぎた赤ん坊である。女の子である。このふたつの条件を満たす存在は数限りなくあるのに、なすなは、なすなでしかない。せりでもはこべらでもなく、なすなでしかない。「私」とはなにか、「ぼく」とはなにかを考える思春期の悩みは、第三者に向けられることがないから、かけがえのない存在、といった言い方はつねに閉じた響きをともなう。だから、親となった人々はみなどこか悟つた顔になり、子のない人々にそれとない圧力をかけているように見えてしまう。しかし、⁽⁴⁾そうではなかったのだ。いまになって、子どもたちと教室で読んださまざまな文章が胸に沁みてくる。

A

ぼくが ここに いるとき
ほかの どんなものも
ぼくに かさなつて
ここに いることは できない

「短期間だけ受け持った塾の低学年クラスで、この、まど・みちおの、⁽⁵⁾「ぼくが ここに」と題された詩を読ませたことがあつた。⁽⁶⁾低学年と

いう分類は、こういう言葉を前にしたとき、なんの意味も持たない。ハンドボールをやめてからようやくものごとを考えはじめた私には、これほどわずかな言葉で、これほど深甚なことを伝えてくれる世界のあることがまず驚きだつた。そして、遅まきながら「詩」の発見に、心から感謝したいくらいだつた。いつだつたか、亮二にこの詩の話をすると、よほど熱が入っていたらしく、兄貴はさ、スポーツなんてやらずに、文学の勉強でもしてたほうがよかったんじゃないのか、と冷やかされたものだ。教える側の人間が、みずから選んだ教材の言葉の力に動揺しては、先に進みようがない。同僚は《存在論》なんて用語で哲学的な解説をしてくれたりしたのだが、私にはよく理解できなかった。「ぼくに かさな

つて」という、その一行に参つただけだつたから。それでも、いまだにこれは、暗唱できるぐくわずかな詩のうちのひとつになっている。詩はつづく。

B

もしも ソウが ここに いるならば
そのソウだけ
ママが いるならば
その一つの ママだけ
しか ここに いることは できない

なすなを見てみると、この「ママが いるならば」という一行を思い出す。ママのように小さな赤ん坊は、しかし、たったひと粒しかそこにいることができません。「かさなつて」いることはできない。⁽⁷⁾十年前の私は、これを「ぼく」が生きていることの大切さに思いをめぐらす、つまり、「ぼく」を出発点にした詩として読んでいた。ソウやママは、「ぼく」が思い悩んだ末にとらえた世界の構成員であつて、どんなに重い価値があつても、「ぼく」は、まず自分を切り開いていかねばならなかったのだ、と考えていたのだ。

C

ああ このちぎゅうの うえでは
こんなに だいに
まもられているのだ
どんなものが どんなどころに
いるときにも
その「いること」こそが
なににも まして
すばらしいこと として

人は、親になると同時に、「ぼく」や「わたし」より先に、子どもが「いること」を基準に世界を眺めるようになるのではないか。この子が、ここにるとき、ほかのどんな子も、かきなつて、いることは、できない。そしてそれは、ほかの子を排除するのではなく、同時にすべての「この子」を受け入れることでもある。マメのような赤ん坊がミルクを飲み、ご飯を食べてどんどん成長し、小さなゾウのようになっていく。そのとき、それをいとおしく思う自分さえ消えて、世界は世界だけで、たくさんのなすなを抱えたまま大きくなっていくのではないか。私は、なすなの父親ではなく、伯父さんにすぎない。それでも、この子が「こんなに だいじに／まもられているのだ」と言いたくなるほどには、父親的な成長を遂げている、と思いたい。

(堀江敏幸『なすな』より)

※核……ここでは、地球の中心部のこと。核の外側の層をマントルといい、マントルのさらに外側にある地表を含めた部分を地殻という。

問一——線①③のカタカナを漢字に直さない。漢字は一画ずつていねいに書くこと。

問二——線①「涙に、笑み」とありますが、「私」は、なすなが泣く様子となすなが笑う様子をどのようにとらえていますか。いずれかの説明としてふさわしいものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

ア 地の底から地表まで突きあげてくるような力強い泣き声を発する。

イ 大きな泣き声をあげて、なすなの周囲に多くの人を呼び寄せる。

ウ なすな自身の世界だけでなく周囲の世界をもゆったりとしたものへ変化させる。

エ はじけるような笑顔で、周りにいる人間を勇気づける。

オ 小鳥がさえずるような優しい笑い声をあげる。

問三——線②「けらけらと、友菜さんは明るい笑い声をあげた」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「私」の言葉づかいが不自然で、突然大きな声で話しかけてきた「私」が、なすなの笑顔に喜びを爆発させているように思われて、驚かされるとともに微笑ましく感じられたから。

イ 「私」の使った表現が珍しく、なすなの挙動に対してあまりにもおっかなびっくりになっている「私」が、弟の娘に対していつまでもよそよそしい態度で接しているように思われて、おかしかったから。

ウ 「私」の用いた言葉が独特で、これまで赤ん坊の世話をした経験がなかった「私」が、なすなの表情の変化に対して判定を下すことにあまりにも慎重になっていくように思われて、おかしかったから。

エ 「私」の言い方が特徴的で、男の子だけの兄弟で育ってきた「私」が、小さな女の子の扱いにあまりにも慣れていないように思われて、笑うことを我慢できなかったから。

オ 「私」の言い回しが意表を突いていて、新聞記者としてさまざまなことに通じているはずの「私」が、子育てに関してはあまりにも乏しい知識しか持っていないように思われて、意外でおかしかったから。

問四 — 線(3)「期待どおりの泣き声」とありますが、「私」がこのようなのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア なずなのしぐさを見てミルクを欲しがっていると判断し、あとであわてなくて済むように泣き始める前にミルクの準備をしていたところ、やがてミルクを欲しがって泣き始めたから。

イ なずなのしぐさが何を欲しがったのか想像がつかなかったが、なにかを食べたそうにしているのだと仮定してミルクの準備をしていたところ、やがてミルクを欲しがって泣き始めたから。

ウ なずなのしぐさを見てミルクを欲しがると時間に近いことに気づき、すぐにあげられるように泣き始める前にミルクの準備をしていたところ、やがてミルクを欲しがって泣き始めたから。

エ なずなのしぐさがミルクの要求だという確信はなかったが、あとで困らないように泣き始める前にミルクの準備をしていたところ、やがてミルクを欲しがって泣き始めたから。

オ なずなのしぐさを見てミルクが欲しいのかもしれないとは思ったが、ミルクの準備にも慣れてきたので気持ちの準備だけをしていたところ、やがてミルクを欲しがって泣き始めたから。

問五 — 線(4)「そうではなかったのだ」とありますが、ここから「私」はどのようなことを考えていると読み取ることができますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 若く多感な時期における、他者との関わり方についての疑問は、あくまで自己の存在意義の確認にとどまることから、以前の「私」は「他者との関わりの中で自分が成長してきた実感を持つ人々からは無意味な悩みだと思われる」と思い込んでいたが、その思い込みは誤りであったということ。

イ 若く多感な時期における、あるもののかげがえのなさに関する疑問は、あくまで自己の存在意義の確認にとどまることから、以前の「私」は「人の命が何にもかえがたいということを経験的に理解している人々からは見下されている」と思い込んでいたが、その思い込みは誤った認識であったということ。

ウ 若く多感な時期における、かけがえのないものは存在するのかという疑問は、あくまで自己の存在意義の確認にとどまることから、以前の

の「私」は「かえのきかない存在である子どもたちと関わる仕事をする人々からは軽蔑^{けいべつ}されている」と思い込んでいたが、その思い込みは間違いであったということ。

エ 若く多感な時期における、人間とはどのような存在であるかという疑問は、あくまで自己の存在意義の確認にとどまることから、以前の「私」は「地球が多様な生物のつながりから成立することを理解している人々からは批判されている」と思い込んでいたが、その思い込みは事実でなかったということ。

オ 若く多感な時期における、「自分」という存在についての疑問は、あくまで自己の存在意義の確認にとどまることから、以前の「私」は「わが子というかけがえのない存在を持つ人々からは未熟な悩みだと思われる」と思い込んでいたが、その思い込みは正しくなかったということ。

問六——線(5)「『ぼくがここに』と題された詩」とありますが、この詩について説明したものうち、ふさわしくないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア Aの部分では、「ぼく」がある地点に存在している時には他のいかなる存在も同時に同じ場所にいることはできないと述べ、それにより「ぼく」という存在のかけがえのなさを示している。

イ Bの部分では、本来は「ある」と表現するべきマメについても「いる」と表現することで、人間もゾウもマメも表面的には違いがあつたとしても地球上に存在するものとしてはみな等しく価値を持つということを示している。

ウ Bの部分では、大きな身体を持つものの代表としてのゾウと小さなものの代表としてのマメとを比較して、大きさの違いがそのものの存在価値の大きさに影響^{えいきやう}を与えるかを考察している。

エ Bの部分では、「しかここに いることは できない」の前で改行することで「しか」を行頭に置いて目立たせ、大きなゾウにも小さな一つぶのマメにも、その存在には尊いものがあるということを示している。

オ Cの部分では、「まもられているのだ」「すばらしいこと」として「というように本来の語順とはひっくり返して述べられていて、それにより地球上のすべての存在が大切にされているのだということを読者に印象づけている。

カ Cの部分では、「いること」ということばに「」（カギかっこ）を付けて他の詩から引用された表現であることを強調し、この詩が先行して作られた他の詩との関係の中で読まれるように読者を誘導^{ゆうどう}している。

問七——線(6)「低学年という分類は、こういう言葉を前にしたとき、なんの意味も持たない」とありますが、それはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア やさしい言葉で哲学的な考えを解説する詩を読むと、子どもでも難解な哲学を理解することになり、授業のクラスを学年ごとに分ける必要性は感じられなくなるということ。

イ 少ない言葉で深い内容をやさしく伝える詩を読むと、誰もが強く心をゆさぶられることになり、年齢^{ねんれい}といった枠組み^{わくぐみ}で読者を分ける考え方は意味をなさなくなるということ。

ウ あらゆる存在の大切さを強調する詩を読むと、誰もが周囲の人々のかけがえのなさを実感することになり、小さな子どもの考えることに

は価値がないとする見方は成り立たなくなること。

エ 漢字をできるだけ少なく使つて作られた詩を読むと、子どもでも声に出した時の響きにより意識を向けられるようになり、子どもには言葉の力を実感させることが不可能だという考えは通用しなくなるということ。

オ 自己を確立することの重要性を説く詩を読むと、多くの人が物事に主体的に関わることの大切さを認識することになり、子どもだから周りからの手助けが必要だという考えは有効ではなくなるということ。

問八——線(7)「十年前の私は、これを『ぼく』が生きていることの大切さに思いをめぐらす、つまり、『ぼく』を出発点にした詩として読んでいた」とありますが、なすなどの関わりを通して変化した「私」は、今、どのように世界をとらえていますか。本文にある詩のとらえ方をふまえて、八十一字以上九十字以内で説明しなさい。

二 次の記事を読んで後の問いに答えなさい。

(1)※ フーコーの権力論はそれまで支配的であった(2)※ マルクス主義的な権力観を一変させたと言われている。これは、フーコーが権力を抑圧(よくあつ)によってではなく、行為の産出によって定義したことによるものだ。

ごく大雑把に言うならば、マルクス主義的な権力観においては、権力は「国家の暴力」①「ソウチ」と同一視されていた。暴力を独占(どくせん)している階級や機構が権力を抑えつけている、その有り様がボンヤリと「権力の行使」と名指されていたのである。

それに対しフーコーは、権力は抑えつけるのではなくて、行為させると考えた。

たとえば工場で労働者が、②「ケンタイで兵士が、学校で生徒が、然るべき仕方で行為させられている。その意味で権力は、「抑圧」のような消極的なイメージでは捉えきれないのであって、「行為の産出」という積極的なイメージで語られねばならないというわけだ。

したがってフーコー権力論の特徴の一つを、権力と暴力の明確な区別に求めることができるだろう。マルクス主義的な権力観では、それらが曖昧(あいまい)に重ねられていた。フーコーは次のようにはっきりと、権力と暴力を区別する。

実際、権力関係を定義するのは何かと言えば、この関係が、他者に直接、無媒介(むばいかい)に働きかけるのではなくて、他者の行為に働きかけるような行為の形態だということである。すなわち権力関係とは、行為に対する行為であり、なされるかもしれない、あるいは現実になされる、未来もしくは現在の行為に対する働きかけなのである。「それに対し」暴力の関係は、身体や物に働きかける。それは強制し、屈服させ、打ちのめし、破壊し、あらゆる可能性を閉ざす。それゆえ、暴力の関係のもとには、③※「受動性の極」が残されていない。

権力は人々が行為するのを妨げるのではない。権力は行為に働きかけ、人がある行為をするように、もしくは、その行為のあり方を規定するように作用する。言い換えれば、権力は人がもつ行為する力を利用する。それは行為を産出するという意味で「生産的 product」である。フーコーが『監獄の誕生』などで研究したのは、権力による行為産出の特定のパターンであり、そのパターンの歴史的变化に他ならない。

それに対し暴力は、身体に直接に働きかけるという意味で権力から区別される。「それは強制し、屈服させ、打ちのめし、破壊し、あらゆる可

能性を閉ざす」。

萱野稔人はフーコーの言う暴力を解説して、「暴力は、相手の身体にそなわっている※力能を物理的に上まわる力によって、その身体を特定の状態(監禁、苦痛、死……)に置くように作用する」と述べている。権力が相手の行為に働きかけて、相手に行為させるのに対し、暴力は相手の身体に働きかけて、相手を特定の状態に置く。つまり、権力は相手の行為する力を利用するが、暴力は行為する力そのものを抑え込む。

フーコーが暴力を定義するにあたって、「受動性」の語を引き合いに出していることは非常に③キョウミ深い。そしてこの説明は的確である。

暴力関係において、暴力を振るう者は能動的な立場にいて、暴力を振るわれる者は受動的な立場にいる。暴力の行使が成功した場合、相手は完全に受動的な状態に置かれる。その意味で、暴力関係は 1。

では、権力関係においては、権力を行使する側と行使される側の関係はどうなっているか？

ここで注意しなければならないのは、④権力関係において権力を行使される側にいる者は、ある意味で能動的だということである。権力を行使される側は、行為するのであるから。「権力の関係においては、行為者に多少なりとも「能動性」が残されている」。

では、「される」なのに「する」、「する」のに「される」の状態にある行為はどう形容されるべきか？

(5) 便所掃除を例に考えてみよう。嫌がる相手に便所掃除をさせるためにはどうすればよいだろうか？

たとえば、相手の手にブラシをもたせ、その手をつかんで動かすといったやり方が想像できる。たしかにそうすれば相手に便所掃除をさせることができる。

しかし、そうやって相手の自由を奪えば、その結果として産出されるのは、何らかの行為ではなく、単なる身体を受動的な状態である。すなわち、相手に便所掃除をさせたいのに、事実上、自分が便所掃除をするために陥(おと)つてしまつのである。

相手に便所掃除をさせるためには、相手が、ある程度自由であり、ある意味で「能動的」でなければならない。権力はそのような条件を利用してはじめて、相手に便所掃除をさせることができる。

たとえば、「便所掃除をしなければおやつをあげない」といって相手に便所掃除をさせることができたならば、これは権力による行為の産出である。そのとき、権力行使の対象となっている人間は、ある程度自由であり、またある程度の「能動性」を残されている。おとなしく言うことを

聞くか、この酷いやり方に抗議するか、そうした可能性のなかで行為しうる「能動性」である。

この例はもつと恐ろしい内容に変えることができる。権力行使の手段をおやつではなく、※アレントがカツアゲの事例で持ち出した銃に変えても事態は変わらない。それは、相手の行為に働きかけて、相手に行為させる、そして行為のあり方を規定するように作用する行為である。

武器で脅して便所掃除をさせるのは、武器が出てきているため一見したところ暴力の行使のように思われるかもしれない。しかし、そうではない。蒼野が明確に述べている通り、これは権力の行使とみなされなければならない。武器はこの場合、行使可能性に留まっているからだ。相手には、おとなしく服従するか、相手の暴力に対峙するか、それとも逃げ出すか、そうした可能性のなかで行為しうる「能動性」が残されている。

それに対し暴力は「あらゆる可能性を閉ざす」のだった。つまり、先ほどあげた、相手の手にブラシをもたせ、その手をつかんで動かすという事例こそは暴力行使の事例である。この事例では力が直接に身体に働きかけており、その身体には、手を強制的に動かされる以外の可能性は閉ざされている。

こう考えると、暴力には大きな限界があることが分かる。暴力は相手の身体を押さえ込み、受動性の極に置く。したがって、そこからは行為を引き出すことができない。言い換えれば、「暴力の行使それ自体によつては服従を獲得できない」。服従を獲得するためには、暴力は行使可能性のうちに留まっていなければならない。

フーコーは「権力のあるところには抵抗がある」と述べているが、これは抵抗の可能性が減少するとともに、行為を規定しつつ産出するという権力の効力も減少してしまうことを意味する。抵抗できないほどに衰弱している相手には、便所掃除をさせることもできない。

権力と暴力が混同されがちであるのは、権力がしばしば暴力を利用するからである。暴力が行使可能性に留まりつつも効力を発揮するためには、権力を行使される相手がその暴力の恐ろしさを理解していなければならない。したがって権力は、暴力の恐ろしさを理解させるために、暴力を限定的に用いることがある。

その際、暴力をどの程度限定するかによつて権力の効力が規定される。たとえば相手を立ち上げられないほどに殴りつければ、その相手はもはや行為できず、権力の効力は限りなくゼロに近づく。つまり、権力は十分に効力を発揮できない。繰り返すが、権力の行使は、行使される側のある種の「能動性」を前提にしているからである。権力はたしかに暴力を限定的に用いることがあるが、暴力の行使は権力の目的と対立する。

ではこのとき、権力を行使される側に見出される、ある種の「能動性」をどう理解したらよいだろうか？ 権力によつて便所掃除させられる者

は能動的であると、そう言うべきなのだろうか？

いや、むしろ次のように問うべきであろう。暴力は相手を受動性のもとに置くのだった。暴力を振るう側は「する」立場にいて能動的であり、暴力を振るわれる側は「される」立場にいて受動的である。では、権力行使に見出されたある種の「能動性」は、この暴力行使における能動性と同一のものであるのか？

両者が異なっていることは明白である。武器で脅されて便所掃除させられる者は、進んで便所掃除をすると同時に、便所掃除をイヤイヤさせられているからだ。権力行使においては、たしかに相手にある程度の自由が与えられているが、その自由は、いわゆる受動性としては理解できないのはもちろんのこと（たしかに行為しているから）、いわゆる能動性としても理解できない（行為させられているわけだから）。

つまり、⁽⁶⁾権力行使における行為者の有り様を「する」と「される」の対立で説明することはできないのである。

（國分功一郎『中動態の世界——意志と責任の考古学』より）

※フーコー……ミシェル・フーコー（一九二六年～一九八四年）。フランスの哲学者。

※マルクス……カール・マルクス（一八一八～一八八三）。ドイツ（プロイセン王国）の哲学者・経済学者。

※受動……本文中では、「される」という意味合いで用いられ、「能動」はその逆で「する」という意味合いで用いられている。

※力能……ここでは、「何かを実行する能力」という意味。

※アレントがカツアゲの事例で持ち出した銃……本文より前の部分で触れている「銃で脅された人物が、自分の手でポケットからお金を取り出して、それを相手に渡す」という事例を指す。

問一——線①～③のカタカナを漢字に直さない。漢字は一画ずつていねいに書くこと。

問二——線(1)「フーコーの権力論」・(2)「マルクス主義的な権力観」とありますが、それぞれの「権力」についての説明として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 他者に働きかけて行動を生み出させるというもの。

イ 他者の行動に対して一方的に制限を加えるというもの。

ウ 他者を殴りつけることで行為を制御する(せいぎよ)というもの。

エ 他者に影響(えいきやう)を与えられる人物のみが力を有するというもの。

オ 他者の自由な創造を認めてうながしていくというもの。

カ 他者に威厳(いげん)を示すことで服従を獲得するというもの。

問三——線(3)「受動性(じゆうせい)の極(きょく)しか残(のこ)されていない」とありますが、そのように言えるのはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 暴力は身体に直接働きかけ、対象者の能力や実力を上まわる力で様々な制限を加えて対象者を完全に抑圧するため、対象者は相手からの作用を受けるしかない状態に置かれてしまい、暴力の対象者が自分から他へ働きかける側面はなくなってしまうから。

イ 暴力は行為に直接働きかけ、対象者の能力や実力を上まわる力で制約を設けて対象者を完全に制御するため、対象者は相手からの動作を受けるしかない状態に置かれてしまい、暴力の対象者が自分から積極的(きふせき)に行動する側面はなくなってしまうから。

ウ 暴力は身体の持つ力能に直接働きかけ、対象者の能力や実力を上まわる力で圧迫(あつぱく)して対象者を完全に抑制するため、対象者は相手からの影響を受けざるを得ない状況に追いやられてしまい、暴力の対象者が生産的(せいさん)な行動を取ることができなくなってしまうから。

エ 暴力は行為のあり方に働きかけ、対象者の能力や実力を上まわる力でその枠組み(わくぐみ)を規定して対象者を完全に統御(とうぎよ)するため、対象者は相手からの圧力を受けざるを得ない状況に追いやられてしまい、暴力の対象者が主体的(してい)に行動していくことができなくなってしまうから。

オ 暴力は身体の状態に働きかけ、対象者の能力や実力を上まわる力で束縛(そくばく)して対象者を完全に抑止するため、対象者は相手からの権力行使を受けるしかない状態に追いやられてしまい、暴力の対象者が自由に創造性を発揮するという側面はなくなってしまうから。

問四——線(4)「1」に入る表現として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

1

ア 能動と受動の共犯関係によって生まれる

イ 能動と受動の双方(そふほう)が重要となる

ウ 能動と受動の調和を核としているといえる

エ 能動と受動の対立のなかにある

オ 能動と受動の拡散していく方向が問題となる

問五——線(4)「権力関係において権力を行使される側(がわ)にいる者は、ある意味(いみ)で能動的(のうどうてき)だ」とありますが、どのような点で「能動的」のですか。三十一字以上四十文字以内で説明しなさい。

問六——線(5)「便所掃除を例に考えてみよう」とありますが、この例の説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手の自由を完全に奪うことで掃除をさせることができるように思えるが、完全に受け身になっている相手に掃除をさせることは不可能であり、掃除をさせるためにはその人に自分で行動できる程度の自由が残されていなければならない。

イ 相手に掃除をさせるためには、その人に一定の自由と能動性が保証されている必要があり、その時に権力は効果を発揮するが、この場合の権力は対象者にとって「何かをされる」という暴力に近いものもあれば、「何かをする」ための条件に近いものもある。

ウ 掃除をさせるには武器で脅すといった極端(きょくたん)な方法もあり、一見すると暴力とも思われるが、その武器が使われるかもしれないという可能性に留まっている限りにおいては、対象者に多少なりとも自由と能動性が残されているため権力の行使と捉えることができる。

エ 「あらゆる可能性を閉ざす」暴力を行使してしまうと、相手の身体に働きかけて手を強制的に動かす以外の可能性を閉ざしてしまうため、自分で掃除をするのと変わらないことになるが、権力は行為のあり方を規定して相手に行為させるため、掃除をさせることが可能である。

オ 自分で身体を動かすことができないほど弱っている人は当然ながら掃除をすることができず、対象者の抵抗する力が弱まれば権力が持っている力も減少してしまうため、権力にも暴力と同じ種類の大きな限界があると言わざるをえない。

問七 ――線⑥「権力行使における行為者の有り様を『する』と『される』の対立で説明することはできない」とありますが、そのように言えるのはなぜですか。「暴力関係」と「権力関係」との違いをふまえて、七十一字以上八十字以内で説明しなさい。

問八 本文中では「権力関係」、「暴力関係」という二つのあり方が示されていました。「権力」の例、「暴力」の例として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア おじいちゃんと一緒に初日の出を見ようと約束していたのに、目覚まし時計をセットしても起きることができず、気がついたときにはお昼になってしまっていた。

イ 虫歯になったものの、治療のときの痛みや音がどうしても苦手で、歯医者に行くことを拒否していた。とうとう親が怒り、私の腕を無理やり引つ張って病院へ行った。

ウ いつも遊んでいる公園で、たくさんのゴミがポイ捨てされていることに気づいた。とても嫌な気持ちになったので、ゴミを拾っていたら通りがかった人に褒められた。

エ どうしても欲しいものがあつたので、お小遣いを少しずつ貯めて買うことにした。時には我慢しなければならぬこともあり辛かったが、お金が貯まり手に入れたときの喜びはこの上なかった。

オ おもちゃで遊んだらそのままにしてしまうことがよくあつて、おばあちゃんに「今度片付けをしなかったらおもちゃは取り上げる」と注意された。それ以降はすぐ片付けるようにしている。

(問題は以上です)

